

若松城天守閣展示リニューアル
検討結果報告書

令和3年11月

1 施設の現状

(1) 鶴ヶ城天守閣

鶴ヶ城（若松城）天守閣は、昭和40（1965）年8月に、地上5階地下1階鉄筋コンクリート造1,458.68㎡の天守閣、鉄骨造平屋建282.36㎡の走長屋、木造平屋建164.74㎡の鉄門を一体として整備され、築56年が経過している。

また、平成12（2000）年12月、木造二重檜入母屋造304.46㎡の干飯櫓・南走長屋が復元され、鶴ヶ城天守閣の一部を構成している。さらに、平成22（2010）年度には「往時の天守閣再現事業」により、屋根を赤瓦に葺き替え、幕末当時の天守閣が再現された。

(2) 鶴ヶ城天守閣への近年の入場者の動向

鶴ヶ城天守閣は、再建以来、入場者数を伸ばしてきたが、バブル期の平成4年度をピークに減少傾向に転じた。平成22（2010）年度の「往時の天守閣再現事業（赤瓦）」の工事や、平成23（2011）年の東日本大震災の影響などから、一時大幅に減少したが、平成25年には大河ドラマ「八重の桜」の影響により年間平均60万人程度まで大きく回復した。令和2年度においては、新型コロナウイルス感染症の影響によって全国的に観光需要が急落し、年間入場者数が約27万人と大幅に減少した。令和3年度においても、例年の3割から4割程度に低迷する状況が続いている。

また、入場者の内訳としては、主に教育旅行である20歳未満と60歳以上のシニア層で約7割を占めており、20代～40代の層が1～2割程度となっている。

さらに、若松城天守閣の年間入場者が約60万人であるのに対して、県立博物館や御薬園、その他民間観光施設においては、若松城天守閣の約10%～20%にとどまっている。

(3) 「若松城天守閣郷土博物館」としての役割

若松城郷土博物館は、博物館法に基づく博物館ではないが、これに類似する施設として、干飯櫓・南走長屋を除いた部分を「若松城天守閣郷土博物館」と称している。再建当初は、郷土文化財全般の収集、展示を行っていたが、福島県立博物館が昭和61（1986）年10月に開館した後は、当時の会津若松市郷土文化財運営委員会の意見を踏まえ、「武家文化及びその時代」を中心とした展示方針とした。

また、平成15年に実施した天守閣リニューアルの検討にあたり、国・県指定の文化財などを展示公開する施設としては、空調などの環境面で劣るものであり、貴重な文化財の展示に適するための大幅な改修が現状の建物構造では見込めないものであるため、「文化財資料の展示も含む観光施設」として、機能の強化を図ることと結論づけられた経過がある。

(4) 展示コンセプト

平成27年に開催された天守閣リニューアルの検討にあたり、「会津の武家文化とその時代」及び「城の歴史」をコンセプトの中軸として展示し、各層ごとにコンセプトを定めている。

【各層ごとの展示コンセプト】

- (一層) 「鶴ヶ城の歴史と会津の遺産」
- (二層) 「領主の変遷と国づくり」
- (三層) 「幕末の動乱と会津」
- (四層) 「会津ゆかりの先人」
- (五層) 「展望層から観る会津」

2 リニューアル検討に至った経緯

(1) これまでの経過

鶴ヶ城天守閣は、昭和40（1965）年に再建されて以後、本市の郷土博物館であり、会津若松市のシンボルとして、市民や観光客に親しまれている。

平成15年に展示の全面リニューアルを実施し、平成22（2010）年度には「史跡若松城跡総合整備計画」に基づく「往時の天守閣再現事業」として、幕末当時の赤瓦による天守閣を再現する大規模な改修を実施した。また、平成27（2015）年度には天守閣再建50周年の節目となる年として、博物館や資料館などに対するニーズの多様化、展示技術の進化、団体から個人へといった観光形態の変化などに対応し、施設の更なる魅力向上を図るため、内装及び展示の全面リニューアルを実施し、会津若松市の観光拠点として、毎年多くの観光客が訪れている。

(2) リニューアルの検討（令和5年度に向けて）

平成30年度に、鶴ヶ城天守閣の長寿命化に係る基礎調査を実施し、耐震補強に伴う長寿命化工事を令和4年度下半期に向けて計画している。

天守閣長寿命化工事に併せて、約半年間の閉館期間を経て、再オープンに向けた展示のリニューアルによる更なる誘客対策として、展示及び各層ごとのコンセプトは継承しつつ、新たな視点を加えた展示手法や展示構成を検討したものである。

市当局においては、こうしてまとめた当検討会における協議の経過を十分に踏まえていただき、可能な限りこの報告書に沿って事業を推進されることを切に希望するものである。

【検討経過】

第1回	10月14日	○事業の趣旨、実施スケジュール、方向性の説明
第2回	10月25日	○展示手法及び構成についてのワークショップ
第3回	11月11日	○天守閣展示リニューアル検討報告書（案）の作成
第4回	11月25日	○検討報告書完成

3 目指すべきリニューアルの方向性

(1) 天守閣再オープンに向けた話題性のある展示

令和4年10月から令和5年3月末まで、天守閣長寿命化工事により閉館することから、令和5年4月のオープンと併せたアフターコロナに向けて、市民のシンボルとして、そして、本市を代表する歴史的資源として、将来にわたって魅力ある施設であり続けるため、よりシンボリックな存在として市民や観光客に認識されるような展示内容とされたい。

(2) 20代から40代までをターゲットとする展示

鶴ヶ城天守閣においては、登閣者は主に教育旅行である20歳未満と60歳以上のシニア層で約7割を占め、20代～40代の層が1～2割程度となっており、今後登閣者を増やすために、情報の拡散力及び消費購買力が高い20代から40代までに向けた展示が必要であると考ええる。

(3) まちなかへ周遊を促す展示

若松城天守閣の年間入場者が約60万人であるのに対して、県立博物館や御薬園、その他民間観光施設においては、その約10%～20%にとどまっていることから、若松城天守閣から市内観光施設及びまちなかに周遊を促すゲートウェイ機能の強化が必要であると考ええる。

4 展示の手法

(1) デジタルを活用した展示手法

デジタル（AR、VR等）を活用し、史跡の中にある博物館として史跡や文化財等の付加価値を高め、誘客を促す展示手法が必要であると考ええる。

ディスプレイによって季節ごとに変化する展示や、ARによって再現された幕末の城下町や戊辰戦争の様子が5層から眺望できる展示などが意見としてあった。

(2) 登閣者の市内まちなかへの誘導を促す展示手法

史料の解説等により、登閣者が興味を引くコンテンツを自ら選択し、深堀するためにまちなかへ誘導されるような展示が必要であると考ええる。

売店から先のスペースを活用したマルチディスプレイ等のデジタルによる情報の案内や、幕末当時の城下町と現代のまちなかの比較、現存する文化財施設を紹介する展示などが意見としてあがった。

(3) 文化財の展示手法

天守閣収蔵文化財以外にも、本市ゆかりのある希少性の高い文化財が展示できるような展示手法の工夫が必要と考ええる。

特別な文化財を展示するための温湿度管理や、害虫・カビ等の危険を回避出来る展示ケースの導入、警備対策、消防設備の環境整備などが意見としてあがった。

5 展示構成

(1) 登閣者の誘導に配慮した展示構成

天守閣の階段から各層の入り口に係る一部で滞留を生んでおり、登閣者のスムーズな進行を促す誘導に配慮した構成が必要であると考えられる。

(2) デザイン性に配慮した展示構成

博物館機能に加え、展示文化財以外の撮影可能箇所においてSNS等での拡散に期待できる展示を取り入れ、デザイン性に配慮した構成及び展示空間により、鶴ヶ城の歴史好きだけでなく、入館者の割合が少ない20代から40代の登閣を促す構成が必要であると考ええる。

(3) コンセプト及びストーリー性の重視

全館を通した「ストーリー性」を重視する必要があると考ええる。施設のエントランスにあたる「塩蔵（地階）」からはじまり、現在の会津若松を眺望する「展望台」までの間が「過去から現在への動線」となるイメージの展示構成を継続すべきであると考ええる。

以上